古泉一樹の幇助

深鏡椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
古泉一樹の幇助

【Ｎコード】
Ｎ１４３１Ｇ

【作者名】
深鏡椋

【あらすじ】
ループする夏休みを終えたキョン。キョンの様子がおかしいと勘ぐる古泉は、キョンを外に連れ出す。

（前書き）

短編３部作の第２部です。第１部・涼宮ハルヒの感慨、第３部・鶴屋さんの傷心も合わせて読んでいただけると嬉しいです。

いつもより彼の表情に覇気を感じません。
いえ、いつも覇気よりも倦怠感の付きまとう彼ではあるのですが。

夏休みがあけ、まだ暑さは夏であることを主張する9月中旬。
僕たちはいつものようにＳＯＳ団の部室にて暇を持て余していました。
今日、涼宮さんは用事があるようで、部室に来て朝比奈さんのお茶に舌鼓を打って早々に部室を後にしました。
ということで、部屋にいるのは涼宮さんを除く4人というわけですが。
当然、そんな中で僕が『彼』と称するのは一人しかいません。
「なんだ、古泉。俺の顔になにかついてるか？」
「いえ、なにも」
この人はとにもかくにも、見ていて飽きません。
彼ならなにかをしてくれるんではないか、そんな考えが僕の頭を満たします。
「それにしても暑いですね」
「そんな涼しい顔で言われても、信憑性にかけるな」
「涼しい顔ですか？」
「みてるこっちも涼しくなりそうだぜ」
「それはよかったです」
「そうだな、よかったな」
おそらく会話一つは大したモノではありません。
彼とて意識して返しているわけでもないでしょう。
しかし、僕は彼の一言を一文字たりとも聞き逃さない。
彼の行動は組織にとって、僕にとって大きな意味を成すのです。
「夏バテですか？」

「いや、そういうわけでもない。夏バテするほど年老いてはいないさ」
年老いたら夏ばてするモノなのでしょうか？
そんな疑問に思考を委ねつつも、意識は彼から離しません。
「どうですか、あなたさえ良ければ、遊びにいきませんか？」
「いいですね、楽しそう」
返答があったのは彼ではなく朝比奈さん。
別にあなたを誘っているわけではありませんよ、と内心で呟きながらも言葉に出すことはしません。
ただ、眼力で訴えるだけ。
「あ、あ、こ、今回はキョンくんと古泉くん二人で楽しんできてください。たまには男の子同士っていうのもいいでしょう？」
朝比奈さん、あなたは本当にいい先輩だと思いますよ。
「そうですか？男同士なんてむさくるしいんで、自分としては朝比奈さんも参加していただいて花を添えてもらいたいところなのですが」
眼力。
「い、いえ、今回は遠慮させてもらいます。あ、あの、長門さんと買い物に行ってきます。たまには、ほら、同性同士の買い物も…」
「……私は別に買うものなどない……」
ふいに長門さんが本から視線を上げます。
長門さんに眼力が通じるとは思えません。
なので、再び眼力。
「ひ、ひぃっ、な、長門さん、私の生命の危機なんです。一緒に買い物にいきましょう！ぜひ行きましょう！さぁ行きましょう！」
「？……わかった」
同意をしていただいたので朝比奈さんは長門さんを連れて部室を後にしました。
しかし、メイド服のまま出て行きましたが、いいのでしょうか？
まぁ、朝比奈さんには悪いですが、あなたは保護の対象にはなっ

ていますが、あなた自身には興味がないんですよ。
部室は二人だけの空間になりました。
肺に新しく空気を吸い込む。
その中にあなたが吐いた空気は入っているのでしょうか？
「なんだ、そんなに見られても俺は涼宮じゃないから閉鎖空間なんて作れないぜ？」
「あなたの作る閉鎖空間はどんなものなのでしょうね？」
「さぁ、作ったことないからな。それ以前に作ろうとも思わないがな」
「それは僕としても助かります」
そう微笑むと、彼はゆっくりと席を立ちました。
「どうした？遊びにいくんだろ？」
「はい、そうですね」
相変わらず倦怠感が纏う動きでしたが、僕の心は倦怠感とは無縁のところにありました。

外に出るとあなたは大きく深呼吸をしました。
やはり疲れているのでしょうか？
「さて、どこへいく？」
「ゲームセンターとかいかがですか？」
「相変わらず、お前はゲーム好きだな」
「ええ」
ゲームしている間はあなたとふたりだけの世界ですからね。
「まぁ、いくか、ゲーゼン」
「はい」
少し前を歩くあなたの背中から離れないよう、僕はゆっくりと足を踏み出した。

他愛もない、まぁ、僕にはその他愛のない会話も価値のあるものなのですが、会話をしながらゲームセンターへと赴きました。

「何をする？」
「格闘ゲームとかいかがです？」
「久しぶりだな。ＳＯＳ団に入ってから中々こういう時間は取れなかった」
「そうですね」
あなたの口に微笑みが浮かびました。
少しはあなたの気分を晴らせることができるのでしょうか？
レバーを逆手に持ち、手首を回すようにしてレバーの動きを確かめるあなたを横目でみて、僕は反対側へ座ります。
あなたはパワーキャラの柊かがみをセレクト、僕は防御力に定評のある柊つかさをセレクト。
「古泉、お前やる気だな」
「ええ」
オールマイティーキャラであるかがみが唯一相性の悪いとされているのがつかさなのです。
知識ではあなたに負けませんよ。
しかし、開始１分。
『いいかげんにしなさいっ！』
『おねえちゃぁあああん！』
画面一杯に現われる文字は『ＹＯＵ　ＬＯＳＥ』。
「あの、もう一回チャレンジしていいですか？」
「おう、いいぜ？」
その後１０戦行いましたが、やはり勝つことはできませんでした。

「古泉、悪いな」
「い、いえ」
あなたと僕は席を立ちます。
ゲームセンターに視線を走らせるあなたでしたが、ふいに何かをみつけたようです。
「お、エアホッケー！やらないか、古泉」

「いいですね。僕でよければお相手しましょう」
心持か顔色がよくなったような気がします。
エアホッケー台を挟んで向かい合います。
……これは……あなたの表情がよく見えて魅力的です……
「気持ち悪いな、微笑むなよ」
「おや。僕はいつもこんな顔ですよ」
「言われてみればそうだな」
ゲームが始まると視界に入るのは楽しそうに微笑むあなたの表情。
あなたが微笑んでくれるのであれば、微笑んでくれたのであれば、僕はそれだけで幸せなんです。

ゲームセンターから出るともうそろそろ夕刻になろうとしていました。
「最後にあなたにお見せしたいものがあるのですが」
「このさいだ、付き合ってやる」
僕はあなたを連れて高校へ続く坂を上る。
「おい、古泉、どこへいくんだ？」
「もうすぐですよ」
坂道を左に折れ、しばらく歩くと目の前に草原が広がります。
「どうですか？圧巻でしょう？」
眼下に広がる町並み、髪を揺らす風。
「あぁ、気持ちいいな。ちっちゃいことに悩んでいた俺がバカみたいだ」
「やはり、悩まれていたんですか？」
「お前にはバレバレだったか。夏休みさ、エンドレスでループしてたろ？」
「そうですね」
涼宮さんが夏休みが終わるのを拒否したのが発端でしたね。
「今、この瞬間の俺もループしてるんじゃないかって思ったんだ。

何回目の9月なんだろうか、ってね。違うのはわかってるんだ。だが、あーいうのを一回経験しちまうと……」
「じゃあ、今までにない経験をすればループしてないって思うかもしれませんね」
「ん、まぁ、そうだな」
僕はゆっくりと彼の視界を手で塞ぎました。
「こ、古泉！？」
「……青空綺麗でしたか？」
「ん…あ、あぁ」
ゆっくりと僕はその青空へと視線を走らせます。
……そろそろですか。
僕はゆっくりと彼の視界を開放します。
彼の視界を染めるのは青とオレンジのグラデーション。
「あ……」
「いかがですか？今までこの景色をごらんになったことはありましたか？」
「ないな……こんな景色……みたことない……」
嬉しそうな笑顔を見れた。
それだけで僕は、この放課後のひと時が価値あるものに変わるのです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1431g/

古泉一樹の幇助

2010年10月8日15時21分発行